



広縁からお参りされる参詣者。

た。(以下はその時の法話の要旨)

仏を信ずるといふことは、「よく分からないことをあてにすること」ではありません。また、死後の世界があるかないかに「賭け」

心とは「分かる」ことです。また、心がきれいになつて、いのちの底に「何かが見えてくること」をいいます。いのちの底に、独りぼっちではない、大きな仏

では、「分かる」といふことは「成る」といふことです。「成る」とは、私が少しはましな人間になるという

ことです。「分かった」けれど何も変わらないというはおかしい。分かつたら少しは味が出るんじゃないかと

思いませんか。ところがお説教では、布教使さん

は「成る」んだけれども「死んでから」「成る」といいます。この世の話をしてい

いのちがあるといふことが知られてくるといふことです。それは私の地獄行きの性根が見えてくるといふこととひとつとなつて知られてまいります。

また、「分かる」といふことは「成る」といふことです。「成る」とは、私が少しはましな人間になるという

ことです。「分かった」けれど何も変わらないというはおかしい。分かつたら少しは味が出るんじゃないかと

思いませんか。ところがお説教では、布教使さん

は「成る」んだけれども「死んでから」「成る」といいます。この世の話をしてい

いのちがあるといふことが知られてくるといふことです。それは私の地獄行きの性根が見えてくるといふこととひとつとなつて知られてまいります。

また、「分かる」といふことは「成る」といふことです。「成る」とは、私が少しはましな人間になるという

る「とおっしゃる。道元(曹洞宗の開祖)さまは「この世で仏に成る」といふが親鸞さまは「仏になるべき身になる」といふ。この世では、生きている限り仏には

なれないとおっしゃる。生きるということとは人の邪魔をしていふことではないか。私は年をとつてつくづくそのことを感じるのです。この世では仏には成れない、成れないけれど「成るべき身に成る」といふ。

仏のいのちをいただいているのだから、肉体を失つたら、いつでも仏になれる、そういう身にこの世で成ならせてもらつていふこと。真宗を学ぶといふこととは、私が仏に成るべき身にならせてもらうといふことなのです。

その方は、おつれあいと喧嘩をしたりした時など、

「私は(仏になつたとは言わないまでも)仏に成るべき身と成つたといえるのかどうか、この言葉を味わつて生活しています」とおっしゃつていました。

日々の生活で、落慶法座での縁(教え)を味わいながら暮らされている方にお出遇いできたことは、私にとつては何よりも嬉しいことでありました。

二十九日昼席は記念法要を営みました。多数の参詣を予想して椅子を縁側まで並べていましたが、予想を遥かに上回り、立つたまま、また本堂の外から縁におあい下さいました。

記念法要

法中は、二十二か寺から住職および衆徒(お寺に所属する僧侶)計三十



人の僧侶が出勤しました。その時の法話はCD化して、毎月の法座時にお分け

しております。

法要は、色衣(色のついた衣)や七条袈裟(お葬式の時に着用している金襴の大きな袈裟)はやめ、今回は黒衣に五条袈裟(左写真参照)にしました。

日本の仏教は、もともと国家仏教として受容されました。色衣とは、国家が法衣の色によつて僧侶の位を分

けたもので、親鸞さまやその師源空(法然)さま、また八代蓮如門主らが着用しておられた墨の衣とも低い位の色でした。それは今日では、国家仏教・護国仏教(=権力者のための仏教・身分差別)との決別(=民衆のための仏教・反差



法要は黒衣五条で行われた